桜吹雪を駆ける燕

架車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜吹雪を駆ける燕

【Ｎコード】
Ｎ７８１８Ｈ

【作者名】
架車

【あらすじ】
高校３年の火野飛燕は、ある日夢の中に出てきた女の子のことが気になってしまう。しかし、なぜかその女の子には、見おぼえがある。なぜ見覚えがあるのか自分のしまっている記憶を知るためある部活を作り情報収集を開始する。そして、飛燕を中心に事件が起こる。はたして飛燕の中の記憶とは・・・？

プロローグ

プロローグ

ここはどこだ・・。
確か俺は・・・。

気が付くと外にいた。時間帯は夜の１０時。

あれ？あんなとこに桜並木が。
てか、なんか見覚えが・・・。どこだったっけ。

そんなことを考えながら、不思議と足が桜並木の方に向いていた。
この先に行ってみたいという冒険心が、俺を動かした。

改めて見るときれいだな～。

その時、強い風が吹き桜の花びらが舞った・・・。
桜の吹雪みたいに・・・。

ちょっと先に行くぐらいいいよな・・・。
つってもこの先にたぶん何もないと思うけど・・・。

桜並木に入ってみると中は、とても幻想的で美しかった。

すっげー。
もっと先に行きたいな。

先に行こうとしたとき、綺麗な歌声がきこえた。

桜吹雪より綺麗で透き通っている声だった。

だれが歌っているんだ？

どうやら桜並木の先にこの声の主がいるみたいだ。
俺は早足で向かった。
そしてその声の主を見つけた・・・。

あ、れ・・・？

目の前にいたのは綺麗な女子だった。
しかも、同じ学校の制服を着ている。

？

その女子は、なにか聞きたげに俺の方を向いた。

ご、ごめん。

俺は急いで帰ろうとした。

まって、火野くん！

え、なんで、俺の名字を・・・？

振り返ろうとした瞬間、誰かに後ろから殴られた。
そして、目の前が暗くなった・・・・。

第一章夢と歌と閃きと　ＰＡＲＴ１

「はぁ・・・。なんだ、夢オチか。それにしてもベットから落ちるなんて・・・。」
「兄貴ー！！大丈夫か！？」
「ああ。まぁ、一応な。」

頭が少し痛い気もするけど・・・。
それにしても、夢でも同じ学校の制服で美人な人に呼ばれることなんてあんまりないいのに・・・。
もったいない気が・・・。

「おい！兄貴しっかりしてくれよ！！」
「ああ、すまんな。っておい！何笑ってんだよ！！」
「だって、兄貴って一応兄貴の名前にトリの名前がついてるくせにさ、落ちるなんて・・・。」
「うっせー！だからって、大笑いすることないだろ！！！」

今俺の横で笑っているのは、火野大地　俺の弟だ。
かくゆう俺は、火野飛燕　だ。
まさか、この俺がベットから落ちるなんて一生の不覚。

「おい。いい加減笑うのやめてくれないかな？？」
「ごめん、でも、面白くてさ！」

そういうと、大地はまた大笑いをした。

「てか今何時？今日は、お前の入学式だろ。早く行かないと。」
「そうそう、たしか今は、っと。」

俺と大地は時計を見た。
瞬間、夢のことを忘れてしまいそうになった。

「遅刻寸前じゃん！！もっと早くおこせバカ！！」
「兄貴も悪いだろ！！」
「まぁ、いまは、喧嘩しても仕方がない！早く行くぞ！！」

俺は、あわてて着替え、一応おにぎりという朝食を取って学校へ行こうとする。
どんなに忙しくても朝食は欠かせない。
うん。だいじだよ。朝食はね。

「行ってきまーす！」
「まって、兄貴ー！」
「てか、なんで、先に起きていた大地が遅いんだよ！」
「仕方ないだろ・・・。ところで葉月さんは??」

葉月風花　こいつは俺の幼馴染で、昔から何かとつるんでくる。
普段は、あいつが勝手についてくることを大地は知っていたようで聞いてきた。

「あいつには、遅刻しそうだから先に行って、ってメール打った。」
「そうなんだ、兄貴にはもったいないくらいかわいいのに・・・。」

そう、風花は学校中で1、2を争うくらいかわいいらしい。
おれには、そんな感じには見えないけど・・・。

「いいじゃん、どうでも。」
「まさか、兄貴。まだ昔のことを??」

「もういいだろ！！！そのことは、もう終わったんだ・・・。」
「兄貴・・・。わかった。もう言わない。」
「そうしてくれ。」

俺にはいろいろと嫌な過去がある。
今となっては昔すぎてあきれるけどな・・・。
ただ、そんな嫌なことより夢のことが妙に気になる・・・。
あの、女子には見覚えがある・・・。
だけど、思い出せない・・・。

「あ、そういえば転校生が来るらしいってよ。」
「兄貴のクラスに？」
「ああ。なんでも、見たやつ見たやつかわいいだのきれいだの言うからな～。」
「見てみてー！！いいなー、兄貴ばっかり。」
「うっせー！！」
「ところでな、兄貴。俺、部活どうしよう・・・。」
「お前の好きな部活に入れ！」
「なんだよ。兄貴。そりゃ、兄貴みたいに剣道とかうまかったらさ即決めるのに・・・。」

大地が言うとうり俺は剣道が得意なわけで。たびたび名のある大会で優勝する。
だが、大地も大地で頭がいいという才能がある。

「まぁ、そうひがむなって。」
「うーん。あっ！」
「どうした！？」
「そうだ、いいこと考えた！聞いてくれよ兄貴！」
「うーん、とりあえず家に帰ってからだな。学校まであと少しだし・

・・・。」

「そうだな。」

その言葉を最後に学校をめざしチャイムぎりぎりで着いた。

PART1（2）

「今から、入学式を始めます！」

先生の言葉を合図に入学式が始まった。
俺は、まだ夢のことを考えていた。

なぜ、あの、女の子は俺の名前を呼んだのだろうか。
なぜ、俺は後ろから殴られるような感覚に襲われ目が覚めたのだろうか・・・。
あの感覚はベットから落ちただけでは投低味わえない。
まだ、頭がズキズキする・・・。

気がつけば、入学式は後半に行き、新入生の代表挨拶に入ろうとしていた。
確か、新入生代表挨拶には入試で一番成績が良かったやつなんだけど・・・。

「新入生代表挨拶！火野大地！」
「はい！！」

やっぱ大地か・・・。
あいつは、頭がいい。
だが運動の面では、並くらい。

「以上で新入生代表挨拶を終わります！」

気が付くと、大地の代表挨拶は終わっていた。
だが、まだ今日は終わっていない。

入学式の後に転校生の紹介があるのだ・・・。
何人か見たやつがいるそうだが、俺は見たことがない。

「以上で入学式を終わります！」

いつの間にか入学式が終わっていた・・・。
そして、新入生が退場してからすぐ転校生挨拶がおこなわれた。

「今から転校生挨拶をおこないます！それでは夜桜美恵さんお願いします！」
「はい！皆さんはじめまして！今日から皆さんと一緒に過ごしたいと思っています。まだまだわからないこともあると思うので皆さんよろしくうお願いします！」

ずいぶん、はっきりものを言う娘だな・・・。
だけど、確かにものすごく綺麗・・・。

「あっ！！！」
「こら！誰だ！まだ終わってないぞ！！！」
「すいません・・・。」

最悪だ・・・。
だけど、あの娘はたしか夢に出てきた人じゃん・・・。
びっくりした。
でも、確かに綺麗なんだけど、なんかずいぶん前に会った気が・・・。
気のせいかもな。

ようやく、今日の行事がすべて終わった。
転校生、夜桜美恵は同じクラスだからクラスだけの挨拶があるらし

い。
そして、休み時間は、夜桜の話でもちきりだった。
そして、クラスでの挨拶が始まった。
「夜桜美恵です。まだ、この街に来たばかりなのでわからないことが多いと思いますがよろしくお願いします。」
「ありがとう。だれか質問がある奴いるか？」
「ハイ！」
「お、火野。なんだ？」
「何か部活はしていませんでしたか？」
俺がそう聞くと彼女は少し微笑んだ。
「いいえ、何もしていませんでした。」
「そうですか。」
「もうほかにいないなー。」
そして、挨拶は終わった。
だがもう一つ聞きたいことがあった。
だけど、いまさら聞く気にはならなかった。
その日の、放課後。
帰りの準備をしていたら後ろから呼ばれた気がして振り返ると葉月風花がいた。
「ツバメー。」
こいつは、俺のことをツバメと呼ぶ。

昔からだ。
そして、俺はこいつのことをフウと呼ぶ。
人前では風花って言うけど。

「なんだよフウ。」
「あのね、今日一緒に帰らない??」
「はぁ?俺部活が・・・。いや、今日くらい休むか。」
「ほんとにー!?」
「う、うん。どうした?」
「なんでもないよ。ただ、今日部活あるのに珍しいなーって・・・。」
「うん。まぁ、ちょっとな。」
「じゃあ、帰ろっか!」

そして、俺と風花は、校門を出た。

PART1（3）

帰る途中でフウが俺に夜桜のことを聞いてきた。

「ツバメはあの転校生のことどう思うの？」
「うーん。確かに可愛いとは思うけど、なんかなぁ・・・。」
「そうなんだ。よかったー。」
「は？なんで？」
「たぶん私の思い違いかもしれないかもしれないけど見たことあるような・・・。」
「フウもかー。俺もなんか見たことがあるような気がして。」
「えっ！？ツバメも？」
「ああ。で、記憶を手繰ろうとするけどなぜか思い出せないんだよね・・・。」
「私も・・・。」

しばらく、そのことで考えていた。
いくら、考えても答えは出てこなかった。

「はぁ～。」
「どうしたの？そんな深いため息吐いて。」
「ちょっとな・・・。」
「そうだ！ちょっとコンビニ行こうよ！」
「あ？なんで？」
「いいから、ほら、はやく～。」
「ちょ、まてよ！」

コンビニには学校から徒歩3分でつくのであんがい便利だ。
だけど、もうダッシュしたから2分くらいで着いたけど。

「いらっしゃいませ～。」
「てかさ、何でいきなりコンビニなの？」
「いいじゃん。私が行きたかったんだから・・・。」
「そうかぁ？まぁいいや。ちょうど欲しいものあったし。」
「うん。ちょうど私のど乾いてたんだよねー。」

コンビニで買物をした後普段の帰路についた。
少しは気分が紛れたがまだ、少しもやもやが残っていた・・・。
あの転校生は一体どこから来たんだ？
元いた場所を一言も言ってないじゃないか・・・。

「ツ～バ～メ～！」
「うっわ、つめた！！」

いきなりフウがアイスを首筋につけてきた。

「やったなフウ！」
「ふふっ。悔しかったら追いついてみろ！」
「追いついてやるよ・・・。」

俺は基本運動神経はいい方なのでフウなんてすぐ追いつける。
案の定ものの三十秒で追いついた。

「あーあ・・・。追いつかれちゃった・・・。」
「つかれたわ！フウお前足速くなったな。」
「鍛えてるからね！」

なぜ、自慢げに言う・・・。

「そろそろ、家に着くな・・・。」
「そだね。また明日ねー！」
「つうか、テンションたけーな・・・。またな。」
おれは、家に着いた途端ヤラシイ顔をしている大地にあった。
一瞬変態かとおもった。

「兄貴、葉月さんと帰ってたろ～。」
「なんで、しってんだ？」
「兄貴と葉月さんのラブラブの声が聞こえてたからね。」
「そうか。ってか、別にラブラブじゃねえよ。」
「・・・。葉月さんがかわいそうだ。」
「？？、なんかいった？？」
「いや・・・。なんにも・・・。」
「変な奴・・・。」
「ところでさ、今日俺が言っていた閃き当然聞いてくれるよな？」
「どんな、閃きだったっけ？？？」

一瞬嫌な予感がした・・・。

「それは・・・、新しい部活を始めることでーす！当然兄貴には部活やめてもらうけどね。」
「やっぱりな・・・。俺にいいこと一つもないじゃないか・・・。」
「まぁまぁ、兄貴が卒業するまでだからさ。」
「はぁ・・・。もうお前寝ろ。」
「いやだよ、だってまだ明るいもん。まぁ、兄貴が入るかどうかは兄貴次第だからね。決めるための猶予は明日の朝！ということでよろしく！」

そう言うと大地は自分の部屋に帰っていった。

その後、夜までは何もなかった。

今日は、落ち付いて寝れそうだな・・・。

気が付くと暗闇の中へ、意識は堕ちていた・・・。

PART2

「ふわっ！いま何時だ！？」

不規則なアラームの音で俺は目が覚めた。

「兄貴ー！！遅刻するよー！！」

そう言うと大地はまだパジャマのままで俺の部屋に入ってきた。

「おぅい！お前、早く着がえろ！！」

「あっ！しまったー！！」

「早くしろーーー！」

俺が大声をあげたせいかどこかで犬の鳴く声が聞こえてきた。

だが、今は一刻を争うとき。

早く行かないと先生に追い出されてしまう。

俺は急いで買ってあったパンを口にくわえ大地を連れて学校へ向かった。

チャイムの音が鳴り響く。

ギリギリで学校に間に合った。

「あー、疲れたー！」

俺的にはあまり大きな声で言ったはずはないんだが、教室の端でクラスの女子と話している、夜桜さんがこっちを向いて笑いかけたので、慌てて顔を隠した。

「ちょ、どうしたのツバメ？」
「ああ、フウか・・・。俺は真っ白な灰になったんだ・・・。」
「いや、意味わかんないから。」
「まぁ、いいじゃないか。」
「ところで、大地君が昼休み来てほしいって。」
「そっか・・・。？？」
「？、どうしたの？」
「なんか、お前の眼が一緒に行くと訴えていた。」
「ばれちゃったか。いいじゃん。興味あるんだし。」
「じゃあこいよ。」
「さっすが、ツバメ！！」

明らかに大きい声だと思って周りを見たら注目の的になっていた。

「おいっ。そんなに大きな声出すなよ！」
「ええ～！さっきツバメが疲れた～って行ったときと同じくらいの大きさだったけどな。」
「そんなに、でかかったか！？」
「うん。おっきかった。」
「はぁ～。新学期早々これかよ・・・。」
「まぁまぁ。」

テンションが一気に下がる感じを覚えた。

「そうだ、早いとこ弁当食べないと昼休みがなくなってしまう！」
「そうだよ、早く～！」
「そうせかすな。」
「もう、ツバメおそい～。」
「だから、待てって！」

俺は急いで弁当を食い終わると風花とともに大地の教室へ向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7818h/

桜吹雪を駆ける燕

2010年10月14日02時30分発行